



トビアス・ストーリー（1）失意の父

とても嬉しいことに、トビアスさんという素敵な人に会いました。耳慣れない名前でしたので、辞書をひいてみました。「男子名、旧約聖書の外典の一つ、トビトの息子など」とありました。トビト記なら、読んだことがある！と嬉しくなって、もう一度聖書を開きました。トビト記は旧約聖書外典（続編）の最初の物語です。1987年、日本聖書協会の新共同訳が出版されてすぐに、この聖書を求め、珍しくて、最初にあったトビト記を読みました。童話のようなお話が聖書にもあるのネ！と思ったものです。

私の出会ったトビアスさんとは少し離れて、聖書のトビアス・ストーリーをさせてください。トビアスはトビトの息子でした。父トビトがトビト記の主人公ですから、トビトからストーリーを始めましょう。

トビトはユダヤ人です。家系を大事にするユダヤ人ですが、家系という言葉で大事に考えられているのは地位や財産、ましてや血ではありません。「信仰」が継承されているという点で家系が存続するのがまっとうなユダヤ人だったのです。信仰深いトビトは妻のハンナをその点を考慮してめとりました。そして一人の男子・トビアスが与えられました。

彼らはアッシリアのニネベで捕囚の身となっていました。ニネベの王に重用されたこともありました。迫害を受けた同胞を葬ったという彼の善行のせいで、お尋ね者になったこともありました。それでも彼は、貧しい友を大切にする、義理堅い、頑固と言っていいほどの真面目な人物でした。緊張を強いられながら、用心しながら、生活をしていました。けれどもある日、気の毒な同胞を埋葬し、休んでいた時、失明してしまったのです。

その後、妻のハンナが機織りをして家族を支えます。誇り高いトビトは、妻に食わせてもらうなど嫌な気分だったでしょう。つい、誤解して、腹立たしくなって、妻をなじってしまいます。ハンナも負けずに「どこにあなたの正義があるのですか。あなたはそういう人なのです」といいかえします。

妻と口論した後、トビトは悲しみ、ますます惨めで恥ずかしく思い、「生きるよりも死んだほうがよいのです」と呻き、涙ながら、神に祈るのです。



<Tobit and Anna> Abraham de Pape(1658)

- ・ 上の絵は失意のトビトの頑固そうな姿、負けてはいない妻ハンナの働いている様子、質素な生活ぶりをよく描いています。信仰を第一とし、信仰からくる同胞への愛を、命をかけて行ってきたのに、盲目になるという、人としては不条理とも思える苦しみに耐えているトビトに、人間の姿を感じさせられます。（私の感想）